

えていく必要がある。そうした地域のあり方が、交通革命以前から存在していた世界が中東だったのではないだろうか。中東の研究者にとっては、イスラーム以前にしろ、イスラーム後にしろ、移動の問題を避けることはできない。遊牧にしても、イスラーム以前から存在していたことなのである。ともかく、地域を属地的、あるいは属人的という視点から整理して、考えていくことが重要であると思う。

第三点目は、二点目で述べたことにもかかわらず、それぞれの人間が、生まれ育った地域がある。それがどこまでついてまわるのか、ということである。これについては、高橋さんがおっしゃったように、教育が関連してくるし、また家族、あるいは社会も関連してくるであろう。面的世界が主要であった時代には、人はだいたい一定の所に生まれ、育てられていた。文化のインプットが一定の場所で行われていたのである。ところが留学などのために、人が動きはじめると、生まれた所、育った所でない文化がインプットされる面が様々な場所に及ぶ。一つの場所に限られない。つまり、ここで考えたいのは、地域が器であるというこれまでの認識に対し、むしろ人間そのものが器であって、人間が地域を自分の中に取り込んでいくケースもあるのではないかということである。いままでは、一つかせいぜい二つの地域が人間の中にあるだけであったのが、これからは、多数の地域、あるいは文化がある種の愛着空間として、人間という器の中に取り込まれていく。そのような時代が、現在と未来であろうと考えている。

## 冒 頭 発 言 Ⅱ

高 谷 好 一

私もレジュメに三点記した。一つ目は、片倉さんとほとんど重なっている。残りの二点では、中東と東南アジアの対比を具体的な図をもとにして考えを記してみた。

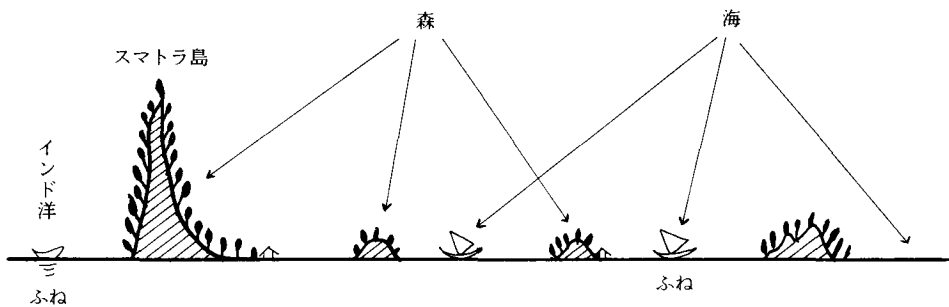
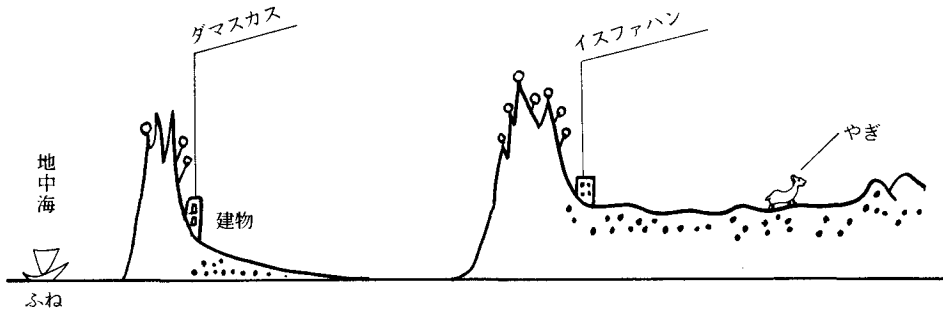
まず地域研究とはいったい何を狙うのか、あるいは何のために地域研究をするのかという問題がある。それに対する私の答えは、ポストモダンの世界秩序を考えると、地域に分割したほうが考えやすいのではないかということである。ただし、ポストモダンの状況において、世界は地域に分かれていくのか、あるいは属人的な「個」から地球世界に直結する形になるのか、の見通しはたっていない。しかし、私はそこには地域が入ると思う。それゆえに地域を考えていきたいと思っている。

ここから、レジュメに沿って話していく。「私の地域研究の解釈」と一番目に書いている。それは、今述べたようなポストモダンの状況における世界秩序を考えたい、ということである。大塚さんがラッキョウの皮むきとおっしゃったが、私はそういった起源論には興味はない。現状における地域を考えていきたい。

ところで、古川さんと、家島さん、大塚さんのご報告を聞いて、二派あると思った。家島さんのご報告と大塚さんのご報告は、私流の解釈では非地域研究的であった。どういうことかという、家島さんのお話では、数学モデルが与えられたように思った。ネットワークがあって、そのノードに原都市ができて上がる。そして農村は、その原都市の要求に応じて後に形成される、というシェーマがある。これはある種の普遍論理であり、そこから議論がなされる。まさに学問であると感じた。大塚さんの場合、様々なことをおっしゃったが、やはりイスラーム学者であると感じた。イスラームを中心におかれているように感じた。いずれも、片倉学派と言えるのではないか。

属人的という視点とは、人間を調べれば世界が分かる、「人」にすべてが付随している、という見方であろう。それは正しいかもしれないが、その視点を採用したとき、地域研究はどのように解釈されるのか、あるいはそれと地域研究はどのように整合性を持つのか、が問題になる。そこで、蝶々の視点と書いた。例えば大塚さんの場合、イスラーム学者というしっかりした位置を占めておられ、そこから中東を見、東南アジアを見、アフリカを見、あるいは社会全体を見る、という定点観測なのである。私は素人であるため、そうした視点はもてない。東南アジアを正面から見るかもしれないし、後ろから見るかもしれない、という極めて無節操な視点から私は地域を見ている。この無節操な立場から言うと、家島さんの数学的なモデルも、大塚さんの学者的な見方も、非常に固いと思った。これについては後に反論があらうかと思うが、とにかく、地域の問題への接近の仕方に明らかに二派あると思った。属人的視点をとる派と属地的視点をとる派である。これは、地域研究を始める際の最初の問題であるように思う。

二点目では、東南アジアと中東との対比、あるいは関連を、抽象的な議論ではなく具体的なイメージとして示したい。それがレジュメの図である。今回、皆が重要であると知りながら、時間との関係もあって、取りあげなかったテーマがある。それは中東における遊牧の問題と、東南アジアにおける森そのものの問題である。



中東の東西断面（上）と東南アジアの東西断面（下）

上の図は中東である。左に地中海、そしてレバントの山脈があり、その背後にダマスカスがある。それから、チグリスの大シリアの平原が拡がり、ザグロスの山があつて、後ろにイスファハンがある。最後にペルシャの高原があつて、アフガンにつながる、という断面図である。これに従つて言うと、レバントとザグロスの山の高いところに木がチョコチョコとあつて、その麓に街がある。そして図では小さく描いてあるが、実際には大きな砂漠、ないしは草原が拡がっていて、そこで遊牧が営まれている。これが東南アジアと対比した際の、中東のイメージである。

下の図は東南アジアである。左がインド洋で、その後ろの島々はそれぞれ、スマトラとボルネオ、スラウェシなどを表わしている。スマトラ島は、この図のようにインド洋の側は急峻で、マラッカ海峡に平らに伸びている。すべて木で覆われている。次いで、小さな島がいくつかあり、ボルネオ島がある。さらに東には、スラウェシがある。この島々の間に海が拡がっている、という図である。

中東も東南アジアも共に、昨日からの議論されているように、交易のネットワークが広がっている。それは事実であるが、このように図に示してみると、やっぱりだいぶ違う。中東は都市と遊牧の世界だ。一方、東南アジアは森と海の世界である。中東の人々は基本的にはその都市、とりわけ城郭で囲まれた都市の住人だ。そこから出歩いて行って商業をしている。しかし、東南アジアの人達は森の人だ。小舟で海に乗り出すが、多くは森を背にして森のカミガミを恐れながら生活している定着民だ。やっぱり二つの世界は相当違うのではないか、というのが私の考えだ。

こんな単純化をした後で言い出すのはおかしいのだが、本当の中東はどんな具合になっているのか、教えていただきたい。中東班の方々の中東の中での差異について触れておられたが、そこは本当はどうなっているのか。一つの世界として捉えてよいと考えているのか、あるいは分けられるのか。これについてうかがいたい。

私は、実は分けられるのではないかとも思っている。例えば、今日大塚さんがおっしゃった農事暦の話や、魔除けの習慣などを考えると分けられるように思う。そうしたところからは小文字のイスラームが出てくるのではないかと考えている。大塚さんは、今日の話では、大文字のイスラーム、つまり正統的なイスラームがやはりあるのだ、ということ強調していた。小文字のイスラームで考えると、地域はどのようになるのか。それを教えていただきたい。

上岡さんは、片倉さんの本の中で地と柄という考え方を書いておられた。柄ばかり見ているとイスラーム世界は一様に見えるのであるが、地は違うといったようなことを書いておられた。そうした観点からいうと、バルシャやトルコは、同じイスラームであっても他の国とは違うということになるのだろうか。属人地域という発想は大変重要だと思うのだが、中東の実体を知るために、そのあたりのところを教えていただきたい。